

☆☆東京2020オリンピック特集☆☆

7月30日～8月8日に開催された「東京2020オリンピック」に神奈川出身の4名が出場しました。

- ◎ 松枝 博輝 (富士通) 5000m
- ◎ 泉谷 駿介 (順天堂大学) 110mH
- ◎ 江島 雅紀 (富士通) 棒高跳
- ◎ 石川 優 (青山学院大学) 4×100mR

◆ 神奈川県出身オリンピックからのメッセージ

◎ 松枝 博輝 (富士通)



私は今夏開催された『東京2020オリンピック』に出場することが出来ましたが、そこで大きな挫折を経験しました。それは世界との圧倒的な力の差であり、オリンピックに出場するためやチャンピオンになるための努力の差の違いを痛感させられました。

そして、オリンピックが終わった今、途方もない高い壁の前に立っています。私がオリンピックに出場したいと強く夢に描き始めたのは今から8年前、東京でオリンピックが開催されることが決まった日からでした。しかし、当時の私は日本選手権にすら出場することができないレベルの大学生でしたが、なぜか「オリンピックが開催される年には27歳となり、競技者として自分の現役生活中に自国で開催されるオリンピックを目指さなければ男じゃない」という大変謎めいた理由からオリンピック出場を目指していたのです。

そして、私は最初からオリンピックに出場ができるような器をもった選手ではありませんでしたが、競技を続けていくなかで多くの方々との出会いや出場した試合のなかで私は大きな成長を遂げることができ、併せて目標であった東京オリンピック代表の座を得ることができました。昔の私を知っている人からすれば、まさか松枝がオリンピックに出場できる選手になるとは誰も想像ができませんことだと思いますが、私は自分の課題を一つ一つクリアをし、夢の実現へと近づいてきました。そして、この世の中には何事に対しても最初から上手にできる人は誰もいないと私は思っています。挑戦や成功の連続が人を成長させ、その過程の中で失敗や挫折はたくさんあるかもしれませんが、諦めずに前を向いた者だけに夢が見られると思っています。

今までに私を支えてくれた方や応援をいただいた方が多くいますが、本当にいくら感謝をしても足りない気持ちでいっぱいです。そして、オリンピックには一体何のために出場したかったのか？それは私自身の夢の実現のほかに、私が夢を実現することによって応援をしてくださっている方々へ努力することの大切さを伝え、その努力する力を証明したかったからです。

今、私には再び立ち上がる時が来ました。立ち上がるのに時間がかかっていますが、私は立ち上がり方、夢を追いかける楽しさ、近づき方を知っています。誰に何と言われようとも私自身ができると思えば叶うと今後も証明していきたいと思っています。そして、今私と同じように何かに躓いて立ち止まって人がいたら、声を大きくして言いたいです。「たまには休んでもいい。でも、本当のなりたい自分はどこにいる？頑張ったから傷ついただけ、どんどん傷ついてなりたい自分になって行こう！

◎ 泉谷 駿介 (順天堂大学)



今回初の東京2020オリンピックに出場し、結果は予選「13秒28」全体6番準決勝進出、準決勝は「13秒35」全体で10番目、決勝進出とはならず、悔しい結果でした。自国開催ということもあり、オリンピックにかける思いが強かった分、悔しさも大きくしばらく放心状態でしたし、結果を受け入れられずにいました。1ヶ月前の日本選手権では「13秒06」日本新記録で優勝し、今季世界ランキング3位でオリンピック内定したため、メダルとは言わないが入賞出来る実力はあったと思っています。なぜ入賞できなかったのか、自分のオリンピックまでの生活を振り返ると、まだまだ甘えていた部分があったと感じました。もっとオリンピックに向けて準備で

きる事が沢山あり、100パーセント準備をしていかないと勝負出来ないのがオリンピックという大会だと学びました。来年、世界選手権がアメリカで開催されるため、まずは世界選手権に向け力を入れ、3年後に開催されるパリオリンピックで結果を残すため日々鍛錬し、100パーセントの準備をして、メダル獲得を目指していきたくと思っています。世界の選手は身体が大きく、この差を埋めるには自分の長所であるスプリント能力を活かして世界と戦って行こうと考えていますし、小柄な分、素早い動きが得意なため、その利点を活かしてインターバルを刻み、加速していくということでの勝負をしていきたいと考えています。

新型コロナウイルスの影響で無観客、一年延期の開催となり、開催に関して賛否両論舞う中、開催して下さった事に私は感謝しています。結果は残せなかったが、沢山の方に応援していただき、「感動をありがとう」「かっこよかった」などの連絡が連日止まらず、自分が競技を通して誰かの力になれた事がとても嬉しく思いましたし、3年後のパリオリンピックに向けて、今以上に頑張っていこうと感じました。この場をお借りいたしまして、沢山の方に応援サポートして頂きましたことに対してお礼を述べさせていただきます。応援、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

◎ 江島 雅紀（富士通）

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度、『東京2020オリンピック』陸上競技、男子棒高跳に出場させて頂きました。

富士通所属の江島雅紀です。結果は予選敗退となりました。

幼い頃から夢見ていた舞台。スポーツの祭典『オリンピック』中学校在学時、東京でのオリンピック開催が決まりました。

自国での開催という事で、より一層『オリンピック』に対する意欲が増しました。しかし、当時は大きな夢と捉えていました。実力はもちろん、自分が本当に『オリンピック』という舞台に出場出来るのか自信がありませんでした。高校、大学と進学をして競技結果が伸び始め、夢の舞台に一歩ずつ近付いてきた矢先、オリンピックが1年延期になりました。

しかし、自分は前向きに捉えました。1年間の準備期間が出来るのだと考え、練習に励みました。そして今年、有効期限内に東京オリンピック参加標準記録を突破する事が出来ませんでした。世界ランキング制度によって32人の出場枠が与えられ、自身が32番目。最後まで諦めずに支えて下さった、家族、チームメイト、友達等には感謝の気持ちで一杯です。本番を迎え、同競技場（国立競技場）では3回目となる競技会。過去2回と会場の雰囲気は異なりオリンピックの重圧というものを感じました。

冒頭でも述べたように、結果は予選敗退となりましたが、自身の持てる力は出切りました。初めてのオリンピックは悔しさ半分、楽しさ半分と今後の人生において、プラスになると思います。これからも世界へ挑戦していき、3年後のパリ五輪を目指して日々精進して参ります。応援ありがとうございました。



◎ 石川 優（青山学院大学）

今回日本で行われたオリンピックに参加することができ、自分にとってとても貴重な体験をさせて頂いたと感じています。

自分は女子4×100メートルリレーの選手として参加し、国際大会は今回が2回目でしたが、オリンピックは雰囲気が全く違い、より緊張感が高い中で過ごせたと感じています。又、新型コロナウイルスの影響もあり多くの規制がありましたが、海外の方々とのコミュニケーションなど普段ではできないような体験ができたので自分にとってはプラスとなるものでした。

レースに関しては、今回は補欠という位置だったので実際に国立競技場で走ることは出来ませんでした。走っていなくても多くのことを吸収できたと感じており、今後の陸上競技人生においてヒントを沢山見つけることができました。

競技場以外にも、サブトラックや観客席で海外の方々の動きを見て実際にその動作を行ってみたり、自分には持っていないものを沢山身につけることができたと感じています。又、自分が体験したことや学んだことを自分だけに留めておかず、共有することによりみんなでレベルアップをすることができると感じています。又、日本人の選手の方々のメンタルの強さも感じました。自分は国際大会の経験が浅いのでかなり緊張していましたが、他の選手の方々は自分のペースを崩さず自分のやるべきことをしっかりと行っていたように見えて、落ち着いて物事を判断して行動していたと感じました。そういったところを見て、自分はまだまだ未熟だと思いましたしメンタルの弱さを感じたので、オリンピックという大舞台で経験したことを活かし試合ではメンタルは強く、堂々とした選手でいられるようになりたいと感じました。



◆ 神奈川から競技役員として参加された皆さんからのメッセージ



◎ 岡本 克巳

昨年、開催予定の Tokyo2020 オリンピック・パラリンピックが新型コロナウイルス感染症の拡大により、1年の延期を余儀なくされました。世論では今年の感染状況も収まりが見えずに開催についての賛否両論がございましたが、今夏無事に開催されました。今回のオリンピック・パラリンピックで競技役員を行うために2017年11月18日、19日の2日間に渡り、日本陸連主催の NTO 資格試験を受講しました。内容は次の様なものでした。

《1日目》

- ①競技規則基礎知識テスト(60分)
- ② NTO 所定講習Ⅰ(180分)
- ③ NTO 所定講習Ⅱ(180分)

《2日目》

- ① NTO 認定試験(120分) ※英語による試験
- ②基礎知識テスト ポイント解説
- ③実技講習(全国の競技会での研修)、事後課題

上記の試験、講習、実技研修を経て今回の競技役員を務めさせて頂きました。今回の競技会の期間中は毎日の検温、PCR検査、バブルによる移動制限も行われ、感染症対策に万全を期しての運営となり予想以上に苦労するところもございました。

オリンピック・パラリンピックでの担当はマーシャル(跳躍種目 班長)として、主に跳躍種目の競技エリアを統制して、選手対応(トイレの際の案内と記録用紙の記入、ケガ等の対応、監督・コーチとのやりとりの確認、退場時の誘導)が任務となりました。12泊13日を2セットと長丁場の業務となりましたが、安全・安心、健康第一をモットーにやりきることができました。

オリンピックの際に一番印象に残ったのは普段接している中学生・高校生・大学生・一般の競技者と特段変わらずそれぞれが1人のアスリートであるということです。競技結果に一喜一憂する姿は本当に変わらないと感じました。

但し、パラリンピック大会の参加者は違う印象を受けました。競技終了後には、ほぼ全ての選手が競技役員1人1人に感謝の言葉を告げて競技場エリアを後にして行く姿がとても印象的でした。選手、競技役員、その他の関係者も含めて、全員が協力し合う事で初めて素晴らしい競技会となるという事をあらためて実感致しました。今回の経験を今後の選手指導や競技会の運営に少しでもフィードバックできればと考えています。

◎ 金澤 健敏

私は総務として参加しました。間近で競技を観たり、選手と触れ合う機会はなかったのですが、この役で経験できた様々事が自分にとっての財産となりました。

大会は準備不足であった面がありました。1年の延期、直前まで開催が危ぶまれる状況。感染症の対策から招待する選手数の限界、会場の制限により十分な内容ではなかったテストイベント。また、オリンピックレガシーを共有しようとオールジャパン体制で審判を編成した結果、会議や事前準備も簡単にできる状況ではありませんでした。そして、審判業務にあたった私たち NTO と組織委員会、WA(WPA)とそれぞれ独立した組織間のコミュニケーション不足も大きな問題でした。

私の役目は、その穴を埋め、縦横の流れを作ることでした。準備不足であった部分は大会に関わった全員の思いと行動により、すぐ軌道に乗りました。

私が得たレガシーは、大会のもつ熱量の凄さ、その中に自分の身を置くことができたことです。注目されている大会で名勝負、好記録は生まれやすいものです。今後の神奈川陸協での活動においても、広報活動はじめ、事前準備を工夫して参加者、運営側それぞれの興味関心が高まることで競技会が盛り上がることを期待します。

◎ 小原 大祐

今回、ご推薦いただき、2017年より資格取得や様々な研修を経てTOKYO2020大会に競技役員として参加させていただきました。この様な貴重な機会を与えていただき、大変感謝しております。

大会では、神奈川陸協の岡本先生、中野先生と共にマーシャルを務めました。私は主に跳躍の担当となり、競技中の選手の出入り、コーチングエリアの管理、トイレ対応、競技後の選手の誘導を行いました。拙い英語を使い、国際大会に出場している、高揚感で興奮気味の選手や規則に対して大らかな文化を持つ国の選手への対応は、想定された通りの困難さで、かなり疲弊することもありました。

その様な中でも、競技場所に長く留まる係でしたので、多くの競技を間近で見ることができ、誘導の中でトップ選手とコミュニケーションをとる事ができた事は、いち陸上競技人として、得難い経験となりました。

両大会とも11泊12日の長丁場で、23時前後まで競技場に滞在し、翌朝6時台にホテルを出る日程をこなした事、競技場での食事が毎日、サンドイッチとサラダであった事、国際審判員の無茶な指示に振り回されたことなど、体験した事をあげれば切りがありません。

組織委員会の方からも、今回の体験を各地域に持ち帰り、今後のより良い競技運営に繋げて欲しいとお話をいただきました。この様なかけがえのない体験をさせていただき、心より感謝しております。微力ではありますが、今後より一層、精進し、神奈川県ならびに普段からお世話になっている中体連、平塚陸協のお役に立てる様、励んで参りますので、より一層のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

◎ 小谷 昭彦

この度、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」にNTO（国内技術役員）として、参加させていただき、本当に多くの貴重な経験と学びの機会を得ることができました。

まずは、全国から集まったNTOの方々の、その豊富な経験や知識に基づく確かな運営スキルに改めて感心させられたことです。業務を進める中で時には、手順や設定が急遽変更になることもありましたが、その都度皆の協力で迅速に対応して乗り切ることができました。

また、競技者系の業務を通じて選手と関わる中で、競技直前のメンタルコンディション作りの多様さとそれに応じた個々への配慮の必要性に気付き、競技者目線に立った競技役員としての姿勢についてもあらためて考えさせられました。

最後に、このような機会を与えていただいたことに心から感謝するとともに、今後この経験を生かし、本県の陸上競技の振興に少しでも貢献できるよう、一層努めてまいりたいと思います。

◎ 坂本 聡志

私は、前回の東京大会の開催年である1964年生まれであることから、今回のNTOの派遣にあたり、個人的に運命的なものを感じていた。そうした中、パラリンピック大会最終日、マラソンの道下選手の金メダル獲得により、大会最後の表彰式において、直接会場で国歌を聞くことができたことは大変幸せであった。そして、今回の大会で一番印象に残っているのは、男女も年齢も障害の有無も関係なくアスリートの限界に挑む姿であった。もちろん金メダルを獲得した選手はひときわ輝いていたが、予選敗退しても自己ベストを出し、満面の笑みを湛えている選手も数多くいた。また、レース後にお互いの健闘を讃え合う姿も印象的で、中には国際情勢的に対立している国の選手同士もいた中での握手や抱擁は、まさに平和の祭典であることを証明していた。

改めてスポーツの持つ力、魅力を感じた大会だったが、その裏で支える審判の重要性も同時に感じた大会でもあった。この経験を今後の神奈川陸上競技協会の主催大会で、是非活かしていきたいと思う。

◎ 中村 洋士

オリンピック・パラリンピックに関われることになり、日本選手権に競技役員として参加したり、パラ陸上に関するオンラインの研修を受けたりし、技術や知識の向上に努めましたが、何よりも不安なのが「英会話」でした。そんな不安をよそに、配属された部署が「競技者係」。競技者と直接コミュニケーションをとらなくてはならない部署です。

オリンピックがスタートする前は、競技者に伝える英文を考える等の準備をしていました。が、実際は10分でピブスやスパイクのチェック、フィールド競技はバッグの中身も確認しなくてはならないので、英文を読むなんてことはまったくできません。結局、単語とゼスチャーとスマイルを駆使することによって、何とかコミュニケーションをとることができました。

今回、このような貴重な体験ができたのも、神奈川陸上競技協会から推薦をさせていただいたおかげです。心より感謝申し上げます。

◎ 脇田 浩介

「① Please ② OK ③ Thank you」この Word を駆使して 2020 東京オリンピック・パラリンピックに投てき審判として参加してまいりました。

慣れない業務に各種の日本選手権や関東パラリンピック等で研修を重ね、落下判定や器具の運搬、確認等の要領を得始めたものの、本番は主に「競技者担当」となり、コールルームからの誘導、FOP への入場、競技の各種説明と諸注意から退場まで、世界のトップアスリートと接する役目となりました。

世界各国から来られた ITO をリーダーとし、全国から集まった NTO で編成されたチームは情報共有、連携、サポートをスムーズに行い、刻々と変わる業務や要求にも無難に対応することができました。

また、縁石際に位置することが多く、トラック競技選手も最も間近で見ることができ、この上ない幸せな時間となりました。

◎ 中野 賢一

世界中が注目するビッグイベント。その競技会に審判員として参加してまいりました。4 年前に県陸協より推薦いただき、研修や筆記試験を経て NTO (National Technical Official) の資格を取得しました。その後は全日本中学生大会や関東パラ陸上などに派遣させていただき、実務経験を積み、大会本番を迎えました。

私が担当した部署はマーシャルです。マーシャルというと、スタート時に静粛を促したり、フィニッシュ後の競技者を誘導したりという業務が頭に浮かびます。しかし、ルールブックには「マーシャルは場内の完全な統制権を持つ」と書かれており、その任務は実に多様です。不正スタートや途中リタイアした競技者をミックスゾーンに誘導する、コーチングエリアのコーチと競技者とのやり取りを監視する、トラック、フィールドの競技者同士が接触しないよう配慮する、ウィニングランの競技者を誘導する。さらには、競技エリアに入ることの許されないコーチや報道関係者を排除したりと、常に競技進行と周囲に気を配りながら、任務を遂行する必要がありました。

最も苦労した点は、苦手としている英語でのコミュニケーションです。海外の競技者・コーチに対し、単語を並べることで何とか伝達することはできましたが、伝えたいことが十分伝わらないもどかしさがありました。しかし、拙い英語でも競技者から感謝の言葉をもらうことがあり、その点では喜びを感じるとともに励みにもなりました。また、何よりトップアスリートの力強い姿とその競技を間近で見ることができ、大きな感動を得ることができたのは言うまでもありません。

今回のこの貴重な経験を踏まえ、これからの審判活動にも微力ながらさらに貢献していきたいと考えております。光栄な機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。

◎ 安池 滋

日本陸連競技運営委員会に所属して 16 年が過ぎ、本年 6 月で引退させては頂きましたが、最後に大規模大会の審判員として参加出来たことには、一公認審判員として誇りに思っております。当大会では、陸連競技運営委員会の一員として、NTO の養成段階から携わり、数々の難関を克服しての開催でもありました。本番では金澤総務の指揮の基、総務員としての通常業務は勿論、国内では普通に配置されている庶務係が無いため、それをも含んだ業務もプラスとなることで、非常に多忙を極めた内容でした。また、組織委員会と同じ部屋にいる関係もあり、全ての運営上の情報も入ることから、かなり神経をすり減らす状況だったことを今でも思い出します。NTO が最高の審判活動をすることが出来るようにと、それだけを願いながら終了まで何とか頑張れたのではないかと今では思います。

神奈川陸協及び全国から参加された NTO の皆様、大変お疲れさまでした。

◎ 高田 彬成

本大会に NTO として参加させていただき、貴重な経験知を得ることができました。両大会とも 12 泊 13 日の対応でしたので、合わせて 24 泊 26 日の長丁場となりました。役割分担は TIC ということで、2018 年世界ジュニア (岐阜)、2019 年世界リレー (横浜) 等で研修を重ね、本番を迎えました。幸い、神奈川陸協でお世話になっている坂本先生と一緒に部署でしたので、大変心強く、大いに助けいただきながら任を果たすことができました。また、無線から繰り返し聞こえる金澤先生の声や、場内ですれ違ったり見かけたりした神奈川陸協の皆様の姿に励まされました。TIC は、各国の選手団と競技運営をつなぐ窓口であるため、アスリートファーストの気持ちを大切にしつつ、競技規則に則り間違いのない対応に専心しました。各国代表選手やコーチと直接触れ合うことができたことは、世界レベルの陸上競技運営の一端を垣間見る好機となり、審判員としての力量を高めることに繋がったと感じております。こうした機会をいただいたことに、この場をお借りし感謝申し上げます。

◎ 常盤 信欽

オリンピックが終わり自分の役割も無事に終えほっとしているというのが正直な気持ちです。

私は札幌で競歩の時は IRWJ（インターナショナル・レース・ウォーキング・ジャッチ）のアシスタントとなり、マラソン時は給水所担当でした。今まで大会で何度か組んだ事のあるポルトガルの Jose さんに付き国際審判の技術を少しでも盗もうと必死に話かけながら世界最高峰の歩きと国際審判の判定技術を間近で見ながら興奮していました。

コロナ渦で札幌では「バブル式」が徹底されホテルもフロア間の移動も制限され、目と鼻の先にある会場までもバス移動が義務付けられ、バスを何十分も待つ毎日でした。それでも普段、体験できない海外メディアの多さ、外国語が飛び交う会場など「五輪ならではのステータス」も感じる事ができました。今回の経験を振り返り、これから「競歩って面白そう」と思う人が始められるきっかけの場を作り、今後も神奈川が全国で勝負できる一助になればと思います。

◎ 轡田 寛

ロード NTO として始まったオリパラ体験、まずは愚痴からですが大会期間中のタイムスケジュールが過密。就寝時間は 2～3 時間くらいでした。また女子マラソンのスタート 1 時間繰り上げに代表されるように異常な予定変更も驚きでした。それらに対してのみんなの全力の対応はまさに大会の成功に向け意識の高い人たちの仕事だったなぁと今になれば感じます。

もう一つは感動体験、パラマラソンで選手の集団が通り過ぎる時の応援の拍手がすごかったです。テレビの画面を通してでは伝わらなかったと思いますが本当に心がこもった熱い拍手がずっとなりやまないのです。道路の反対側の応援も含め結構な広範囲までずっとです。普通のロードレースの大歓声とは質の違う温かい応援でした。道路の真ん中で監察を勤めながら不覚にも涙が出そうになりました。そんなさまざまな瞬間に関わらせていただいたことに心から感謝します。

～トピックス～

◎ 郡市陸協だより（第 13 回：相模原市陸上競技協会）

相模原市陸上競技協会は、県内だけではなく国内でも有数の長い伝統を持つ協会です。令和元年には多くの関係者のご列席のもと、創立 90 周年記念式典を開催しました。この歴史ある協会の中心となる取り組みは 2 つあり、「競技会等の充実」と「普及（強化）事業」です。

まず、競技会の充実としては「関東学生陸上競技選手権大会（関東インカレ）」をはじめとして、「四大学対校陸上」や「関東学生新人」「全日本大学駅伝関東地区代表選考会」また「関東高校新人選抜大会」「県高校総体」「県選手権」などの大会を開催し、審判技術の向上や競技レベルの向上につながっています。特に、今年度の関東インカレは第 100 回の記念大会であり、泉谷選手がオリンピック標準記録を突破するという快挙達成の大会になりました。さらに、県下で最も歴史があり今年 82 回を数える「北相陸上競技大会」や 2016 年より開催している「相模原クロスカントリー大会」も特筆すべき大会です。そして、今年度から新たに年 6 回の「マンスリーナイター記録会」を開催中です。

次に普及（強化）事業として、現在 29 年間続いている「小学生陸上教室」があります。毎週土曜日にギオンスタジアムやギオンフィールド・クロスカントリーコースなどを使い、年間 40 回程の活動をしています。その中から大学生で国際大会に出場した選手や、中学・高校生で関東や全国大会にコマを進める選手も輩出しています。そしてもう一つ、11 月から 3 月までの冬季に月 1 回の「中高交流練習会」を行い、10 年が経過しました。600 名を超える競技者が短距離・中距離・長距離・ハードル・跳躍（幅跳び・高跳び）・投擲（砲丸）の 6 ブロックに分かれ、担当の指導者から専門的な内容を学んでいます。これらの活動により底辺が拡がり、成果をあげています。

この歴史と伝統を創っていただいた諸先輩方に感謝しつつ、更なる向上・充実を目指して努力してまいりますので、ご支援、ご協力をお願いいたします。
(相模原市陸上競技協会 理事長 松崎 修)

※次回の「郡市陸協だより」は大和市陸上競技協会にお願いします。